

アフリカ文学と Oral Literature (4)

－ その後のヴァン・デル・ポストとブッシュマン －

赤 岩 隆

要旨：ヴァン・デル・ポストによる、物理的な意味でのカラハリの奥地をめざす旅は、*The Lost World of the Kalahari* に描かれたとおりだが、目にみえない次元の旅は、まだ始まってもいなかった。ヴァン・デル・ポストは、*The Lost World of the Kalahari* の、まさしく終わった時点から筆を執り、続編に相当する *The Heart of the Hunter* を書いた。これによりヴァン・デル・ポストは、ブッシュマンという存在のより深くへと踏み込むことになるのだが、本稿においては、そうした内なる探検の過程を辿るとともに、oral literature の本質へと迫る。

1

けれども、それだけで *The Lost World of the Kalahari* の旅のすべてが終わったわけではなかった。少なくともどんな旅も行きっぱなしにはできない以上、もともとの地点へと戻らなければならない。とはいうものの、旅の復路に往路と同等の、あるいは、同等以上の意味をみつけるというのはどうだろうか。ヴァン・デル・ポストは、そうした旅の復路の物語に手を染める。*The Lost World of the Kalahari* のまさに終わった時点から新たな物語を書き始める。そうして出来上がったのが、形のうえではその続編とも見做すべき *The Heart of the Hunter* であった。

このヴァン・デル・ポストの奇妙な著作は、三部から構成されている。前半の二部を通じて、彼の探検隊がいかに帰り道を辿り、隊を解散し、隊員それぞれが帰途に就くか語られる。けれども、旅の顛末をそこまで詳しく語りながら、なおも物語の三分の一以上が第三章として残されている。第二部の終わりで、テーブル湾からイギリスへと戻る船に乗ったヴァン・デル・ポストは、ひとりで保護区まで帰れるかどうか心配の種だった探検隊の通訳のブッシュマンが無事帰宅したことを伝える電報を受け取り、胸を撫で下ろす。そして、「長く悲惨な旅のあとだけに、何年来となく疲れ切っていた」が、「過去において学んだことすべてと、砂漠から持ち帰ったものをひとつにして、海路イギリスに戻る長い船旅の暇つぶしに、そこから何を引き出し得るかみてみよう」と考える(147)。ようするに、残り三分の一の物語において語られるのは、そうした試みにより得られた内容ということになるのだが、そこにおいては、前作の *The Lost World of the Kalahari* も含めて往路復路の物語の全体を通じて流れていた時間がびたりと停止する。それまで通時的に語られてきた物語が、最後の最後で共時的物語へと決定的に変質する。くわえて、そうした共時的物語の内容が、ブッシュマンにより保持されてきた oral literature を総括する試みとなっていることを考え合わせると、この第三部だけをなぜほかから切り離し独立させなかったのかと疑問も湧いてくる。そのほうがスペースの余裕だって得られただろうし、旅行記の結構という点からもより安定が望めるのではないか。しかしながら、ヴァン・デル・ポストは、それら別の選択肢を棄てて、文章上の戦略としてはむしろ不利と思われるやり方のほうをわざわざ選択する。なぜだろうか。

ひとつには、ヴァン・デル・ポストにとって、すべての発見は必然的に旅のなかで行われなければならないということ。それでこそ旅の骨折りという骨折りが報われる。じっさい、*The Lost World of the Kalahari* においても、そのまえの *Venture to the Interior* においても、大切な思考の多くは、そのように旅の実際に密着させながら行われている。一枚のコインの表裏のごとく、旅の時間の流れから思考を分離することは不可能となっている。したがって、ここにおいても、ブッシュマンをめぐる思考の総決算とも見做すべき文章をまとめるのに、時間的な旅の序列を無視しては行ない得なかった。ヴァン・デル・ポストは序文で書いている。

そういったわけで、この本においては物語に外から形を押し付けるのではなく、わたしがした経験の有り様にもっぱら沿いながらその形は決められる。ここでいう経験の有り様とは連続的なものだったのだが、そのことはわたしにとって、この旅におけるもっとも意義深い点のひとつであったから、わたしとしては、それを尊重しなければならないと感じたわけである。(xii)

思考の総決算は、探検隊を解散し、隊員全員の無事の帰宅を見届けたうえで、海路イギリスにむかう船中でなされなければならない。もちろん、これはレトリックでもなんでもない。文字どおり、そうした物理的な時間のなかで「連続的」に実施されたのである。このことは、作家としてのヴァン・デル・ポストについて考える場合、けっしておざなりにできない留意点を強く示唆していると思われる。だが、純粋なヴァン・デル・ポスト論を意図しているわけではない本稿においては、前回の議論同様、深入りは避けることにする。ただし、思考のすべてが動きのなかでなされていることだけは、つねに念頭に置いておかなければならないだろう。じっさい、この条件を外しては、ブッシュマンを生きたまま見つけ出すというそもそもの目的のリアリティがなくなる。それで満足できるなら、わざわざ探検隊を組織し、過酷な旅を経てカラハリ砂漠の奥地へなどむかう必要は、最初から少しもなかったことになる。*The Heart of the Hunter* の第三部を第一部・第二部から異質なものとして隔てているようにみえる（通時的と共時的という）真反対の時間の有り様は、いささかも物語の断絶を意味するものではなかった。それどころか、前者は物語全体の、不可避的なクライマックスにほかならなかったのである。事実、それではじめて旅のもっとも微細な細部までが具体的な意味を担って立ち上がることになる。ヴァン・デル・ポストは、同じく序文で次のように書いている。

しかしながら、砂漠を出る旅を終え、仲間がそれぞれの帰路に就いたとき、ある意味では、旅はまだほんの序の口に過ぎないことを理解した。わたしはもうひとつの旅、自身の心のなかへの、消えたブッシュマンの心のなかへの旅へと駆り立てられている自分を発見した。すぐさまわたしは作家としてジレンマに陥った。すなわち、物理的な旅と心の旅とを分けて、それぞれ別個の物語にすべきだろうか。考えた末に、そうした区別はしないことにした。なぜなら、そうしたことは少しもわたしに起こったことではなかったからである。伝えたいと思っていることが、知識や学者の調査研究というのなら、躊躇いはしなかっただろうが、わたしにはそのうちのどの役割も果たす資格がない。わたしに主張できるのは、自分がおそらくは特異と云えるような経験をしたということ、知識ではなくそうした経験それ自体を伝えようとする権利が自分にはあるということだけだったからである (ibid)。

2

問題となる *The Heart of the Hunter* の第三部において展開されるのは、ブッシュマンが語り継いできた oral literature の精髓とでも呼ぶべきものについてである。ここで「語り継いできた」と軽々しく口にしたが、その起源はじつに原始にまで遡る。ヴァン・デル・ポストによれば、これもまたレトリックとは無縁である。つまり、文字どおりそうだと云うのだが、それゆえにこそヴァン・デル・ポストにとって、ブッシュマンの oral literature はおよそ絶対的な存在意義を持つことになる。なぜなら、それにより伝えられているのは、ブッシュマン以後の人間が文明化することと交換に失ってしまったものを指し示すからである。それほどまでにブッシュマンという種族は、原初そのままの姿をいまだ残している。そうした事実にはヴァン・デル・ポストがことさら積極的な意味を見いだす理由は、彼がとりわけ第二次世界大戦以後の文明の有り様に対して強い危機感を抱いているからにほかならない。人間がブッシュマン的な存在の仕方から離れ加担した成れの果てがいまの文明だからである。ようするに、ヴァン・デル・ポストにとって、ブッシュマンとは、あるいは、その保持する oral literature とは、現代文明の、あるいは、そこに属する人間のアンチ・テーゼとなり得るものなのである。しかも、このアンチ・テーゼは、到って健全正常なものと見做される。病んでいるのは、確実に、文明あるいは現代人のほうなのである。ヴァン・デル・ポストは書いている。

彼 [ブッシュマン] の人生には、現代の個人の心に数の存在の課す、冷たく非人間的な感情はなかった。その場に属していない、あるいは、周囲における生命の過程となら関係を持たないといった感覚——現代人の勇気と個性を秘かに蝕むあの孤独感は欠けていた。現代人を麻痺させる群衆のなかでの個人的な無力感や不安感と、彼の精神とは、まったく無縁であるように思われる。生まれながらの機知と弓矢のみで武装し、どこにゆこうとそこに所属し、生まれてから死ぬまでのあいだに会うすべての人と物に対して親近感を抱く。この「神秘的融即」を、わたし自身は、知られているという意識と定義しようと思う。ブッシュマンは、自分を知るものを通して、知るという作業を行なうのだと、わたしは信じる。(211)

さらに、彼はこうも書いている。

しかしながら、わたしたち現代人は、そうした知られているという意識を持たない。人類がいまほど知識を得たことはないが、突然丘のうえにいる自分を見つけ、ただ風だけが吹いている、あるいは、夜のしじまのなかで目を醒ましたといった場合、現代人は、自分にとってもっとも親しい人たちや自分自身からさえも知られていないと感じ、慄然とする。これほど実体的な重要性を持つことはない。なぜなら、わたしたちは、知られているという感覚を通してはじめて、自分が知っているものを評価し、それを正確に人生と関係付けることができるからである。(211-22)

ひと言で云えば「疎外」と呼ぶべきこの欠落感のことなら、現代人は身に沁みてよく知っているが、それが現代人においては、自然に対してもそうだと云う。たしかにそのとおりだろう。

現代人からすれば、ブッシュマンが平気で採用している生活様式のどの断片も、およそ非日常的なサヴァイヴァルとしか云いようのないものである。そのように分断されたふたつの立場のうち、いっぽうを原始と呼び、いっぽうを文明と名付けるわけだが、それらのあいだに連絡を見つけようとする進化論的優劣を、ヴァン・デル・ポストは少しも是と認めない。なぜなら、彼にとって両者は、けっして二者択一的な対立物ではないからである。それが証拠に、後者に属する現代人は、必ずしも前者と無縁ではない。原始と文明の出会いについて、ヴァン・デル・ポストは、ネガティブな形で次のように書いている。

外なる世界における原始との出会いは、文明人の内部にも存在する原始を刺激する。わたしの故郷の人たちのように、これ以上ない頑固な決意を持って、文明人はそれを拒絶するかもしれないが、それとは関わりなく事態は進行する。拒絶したがために、精神のどこかの裏口を開けて秘かに原始が文明人の生活のなかへと入り込むだろう。そのことは、肯定的要因となる代わりに、否定的で遺恨に満ちた、破壊的要因となる。なぜなら、文明人はそのことを心で歓迎もしなければ、頭で理解しようともしないからである。(208)

たしかに原始は「文明人の内部にも存在する」。それゆえにこそ、文明人の示す拒絶の態度は、その激しさを増すことにもなる。とするなら、原始と文明の関係とは、前者から後者への幸せな進化の過程などではあり得ない。ヴァン・デル・ポストは、両者の関係をむしろ意識と無意識の関係になぞらえる。原始と無意識とは、暗闇へと追いやられたものである。追いやられはしたが、暗闇がなくならないかぎり、きっとそれは存在する。そして、これについてもまた、我々はフロイトやユングのおかげでそうだとすることをよく知っている。スムーズな連絡という形ではないが、意識と無意識とは、歪みながら相互に反響し合う。通底し合っている。原始と文明の関係も同様だと、ヴァン・デル・ポストは云う。そして、両者を結びつけるものとして、ブッシュマンとその oral literature を絶対的なものとして評価する。ただ意識と無意識の場合とは違って、この連絡路は物質的に（取り返しようもなく）失われてしまう危険に曝されている。現在のような調子でブッシュマンを無用な軽蔑すべき種族として絶滅の縁へと追いやり続けるとしたら、必ずそうなる。そう考えたからこそ、ヴァン・デル・ポストは、砂漠の奥地をめざす探検旅行を敢行し、*The Lost World of the Kalahari* や *The Heart of the Hunter* といった著作において具体的に警鐘を鳴らしたわけだが、だとしたら、「砂漠を出る旅を終えて」なお、「旅はまだほんの序の口に過ぎない」と彼が感じたとしても不思議はない。なぜなら、砂漠という物質的次元の隔たりを超えただけでは、事の半分を成し遂げたことにしかならないからである。探検の次に予想される保護の試みが首尾よく進み、ブッシュマンという種族の存続が物質的次元で保証されただけでは、文明と原始の交通が回復されたことにはならない。物質的な次元での旅の成果を、目に見えない次元においても検証する必要がある。旅の前後において、ブッシュマンとヴァン・デル・ポストとの関係は、決定的に異なるものへと変貌を遂げるのだが、それを海路イギリスにむかう動きのなかで、なおかつ共時的に証明してみせること、残る半分の作業とはそれである。その意味でも、*The Heart of the Hunter* の第三部は書かれなければならなかった。じっさい、それなしでは、過酷な探検の詳細は時間的な経過にしたがって徐々に古び、いずれ消えてなくなってしまうだろう。探検隊の解散後も、なおかつ旅を続けようとするヴァン・デル・ポストの選択は、少しも間違っただけではなかったのである。

3

探検という、いわば目にみえる次元での接近を終えたヴァン・デル・ポストは、続いて目にみえない次元においてもブッシュマンに対して接近を試みる。すなわち、精神面や世界観の面で、ブッシュマンとはどういう人たちなのか理解しようとする。前者のアプローチを形而下的とするならば、形而上的にそれに迫ろうというわけだが、もちろん、両者の関係は相互に分断されたものではなく、どこまでも相補的に機能し合うものである。ヴァン・デル・ポストは書いている。

そうしたわけで、わたしはブッシュマンについて書かれたものなら、目に付くかぎりなんでも収集した。そして、そのすべてにくりかえし目を通し、それらはわたしにとって想像上の経験の一部を構成するまでになっていた。けれども、こうしてじっさいの砂漠の旅を終えてみると、ブッシュマンの伝説のわずかひとつを取り上げただけでも、いかにそれが違って見えるか解かった。それからは何事もけって自明のものとはしない決心をした。(147)

ヴァン・デル・ポストは、砂漠の奥にむかう旅を敢行するに先立って、ブッシュマンに関する形而上的な蓄えを持っていた。けれども、その蓄えは、探検によるブッシュマンとの具体的な接触を通じて改変を迫られることになる。そのうえでヴァン・デル・ポストは、ふたたびそうした蓄えの最初に立ち戻り、その再構成を図ろうとする。ようするに、その結果が、*The Heart of the Hunter* の第三部となるわけだが、ここで云う「蓄え」の詳細については、もちろん、不明な点が多い。しかしながら、その柱になっている著作についてはヴァン・デル・ポスト自身により明らかにされている。すなわち、W. H. I. ブリークとルーシー・ロイドによる『ブッシュマンのフォークロア』と、ドロシア・ブリークによる『カマキリとその仲間たち』の二冊である (xv)。それらを指してヴァン・デル・ポストは、「いわば石器時代の聖書の欽定訳」とまで云っているが、とりわけ、前者からの影響は、いまだそれに優る類書が出ていないことを考えてみても、当然のことと肯ける。したがって、ここでも本論に入るまえに、少しだけこの名著について触れておくことにしよう。

ウィルヘルム・ハインリッヒ・イマニュエル・ブリークは、1827年ベルリン生まれのフィロロジストで、1855年に南アフリカの土を踏んでいる。1862年にケープ・タウンでジェマイマ・ロイドと結婚し、その後ジェマイマの妹のルーシーがふたりの住居に同居するようになる。ブリークのブッシュマンとの接触は、はやくも1857年には始まっているが、ブッシュマンをめぐる彼の言語研究が本格化するのは、1870年になってからである。その年に、許しを得てケープ・タウンの監獄にいた純粋なブッシュマンのうちふたりを自宅に連れ帰り、直接に詳しくその言語を学び、あるいは、物語や伝説等を記録に取ることができるようになった。純粋ブッシュマンを相手とするそうした研究は、1875年にブリークが早世した後は、以前より彼の忠実な共同研究者となっていた義理の妹のルーシーにより受け継がれ、1911年になって『ブッシュマンのフォークロア』として陽の目をみることになる。

これは文句なしの大著である。左のページにブッシュマンの音声言語を文字化したものを、右のページにはその英語訳を収めながら、内容は、神話・伝説・寓話・詩、歴史・宗教・習慣

等多岐に及んでいる。語る側にその意思がない以上、全体的な統一には欠けるものの、個々の物語（あるいは、詩や唄）は生気と臨場感に富んでおり、ヴァン・デル・ポストでなくてもその虜になって奇怪しくない。たとえば、書き言葉においては無駄とされる不用意な繰り返しは、それらが明らかに oral literature に由来するものであることを実感として教えてくれるだろうし、そのことは記憶法や暗誦のもたらす快感等とも根本的な結びつきを持っているだろう。少なくとも、*The Heart of the Hunter* の第三部を書くヴァン・デル・ポストにとって、そうしたことはすべて確固として自身の血肉と化していたはずである。したがって、以下においては、問題の第三部を扱うのに、あくまでもそれをヴァン・デル・ポストのオリジナルと見做しながら、必要がある場合には、適宜ブリークの著書に頼ろうと思う。

4

話は、ブッシュマンにとって「創造の原初の霊」とされるドゥファイ (Dxui) により始められる。しかしながら、ヴァン・デル・ポストは、ドゥファイについて語るべき多くの材料を持っていないようである。結果として、すぐさま話の中心はそれと同等と見做される「かまきり」へと移される。この移行は、ヴァン・デル・ポストが育った農場近くに住むブッシュマンたちとの交わりを通じて得られた自身の具体的な経験に基づいている。それに従いながら、ヴァン・デル・ポストは、原初の霊としてはこちらのほうがより完全な像を残しており、「はるかに高度で活発に展開されてもいた」と主張する。といて、「ドゥファイに取って代わるとかそれを否認するといった感じを抱かせるものではなく」、「むしろドゥファイをより完全にしたもの」と見做してよいと彼は云う (161)。それにしても、なぜかまきりなのだろうか。この答えは、ブッシュマンとはどういう人たちなのかということを垣間見るうえで重要であるし、じっさい、ヴァン・デル・ポストは、「ドゥファイとかまきり」と題された章を軸にして詳しくそれについて述べている。同時に、この答えは本稿にとって意義深い議論の発端となりそうな予感もある。したがって、以下においては、まずこの「なぜかまきりなのか」という特徴的な問いに対して、ヴァン・デル・ポストがどのような答えを提示しているか辿っておくことにしよう。

原初の霊がかまきりであることに対する疑いの根拠は、そのつつましさにむけられた侮りに拠っている。だが、そうした侮りを否定して、ヴァン・デル・ポストは次のように書いている。少し長くなるけれども、引用しておこう。

…しかしながら、解かっていることは、当惑するほど多くの選択の余地が周囲にありながら、このつつましいかまきりをブッシュマンが選んだということである。原始的なアフリカの種族は、自身の原初の霊の感覚を、象やバッファロー、大蛇やワニ、ゴリラ、あるいは、自身の囲いのなかにいる黒と白の斑の雄牛といった、立派で堂々とした生き物に託したが、それとは違ってブッシュマンは、身体的には取るに足らないかまきりを選び、選んだ後はそれから決して離れなかった。彼らは自分たちも小さかったので、子どもと同じように、小さなものなかに大きなものを、大きなものなかに小さなものをみるあの繊細な感覚を持っていたのだろう。といて、これは、壮観なアフリカに住む大きくみごとなものたちに対する無関心に由来するものではない。彼らの岩絵は、彼らがそれらをいかに愛し、いかに彼らが創造のデザインに加わる感覚を分け持っていたか明らかに示してい

る。彼らの物語を聴けば、それらもまた彼らにとって、共通の住処である原初の霊の栄光の雲をたなびかせていることが解かる。ブッシュマン同様それらもそうした住処の炉端に自身の居場所を持っている。けれども、その灯りはかまきりが支配した。なぜなら、思うに、生命の意味の要点とは、いうまでもなくユークリッド的なものだからである。重要なのは大きさではなく、霊的な位置だからである。ブッシュマンの魂は、海の魚のようにアフリカの最初の自然に包まれていたから、彼らの想像力は—— 私にはいつもイギリスにおける偉大なブッシュマンの詩人とみえるブレイクのそれのように—— 砂の一粒に永遠をみるよう当然にも定められていたのだろう。それゆえ、彼らはかまきりを創造の円の中心を占めるものとして、その小ささにもかかわらず、もしかしたら、その小ささゆえにこそ選んだのである。(166-7)

あるいは、こうも書いている。

ブッシュマンにとってかまきりは、アフリカ太古の最初の土のなかで、ちっぽけな目にみえない卵として始まった。この卵は芋虫となり、地面を這いずり回っていたが、やがて長い脚と精妙な羽を持つ生き物へと突然変容する。最後に生殖行為においてかまきりは雌により貪り食われる。すなわち、かまきりは、それによってのみ自身の直接的な自己を超えて創造することのできる要因に身を横たえるのである。目にみえない始まりと宿命的な終わり、これがブッシュマンの心のなかのイメージを完成させる。これにより生きた経験とふるまいを通じ語られているのは、創造が誕生であるだけでなく死でもあること、いま現在あるものの死を通して、地上の生命は定められた以上のものになるべく再生するということである。(167)

こうした主張を受け入れるにしろ受け入れないにしろ、通常これにより感じられるのは、ブッシュマンと自身のあいだに広がる膨大な距離だろう。しかしながら、じつはこの距離自体に意味がある。というのも、そうしたブッシュマンという種族がすでに消滅してしまったのならいざ知らず、いま現在も存在しているからである。彼らは遠い昔の、もっと言えば原始状態のもののかをなおも保持している。とするなら、遠く離れていればいるほどよいことになる。少なくともヴァン・デル・ポストはそう考えた。なぜなら、彼がブッシュマンに求めているのは、「原初の霊」とはどのようなものだったのかという問いの答えだからである。ヴァン・デル・ポストに云わせれば、文明とは（あるいは、人類それ自体は）必ずしも進歩の道を辿ってきたとは見做し難い。とりわけ、産業革命以降はそうだと云う。といて、時計を巻き戻し原始に戻るなどできるわけもないし、もちろんじっさいにはその必要もないのだが、ただ、それらがある意味において退歩の道を辿り、そうすることで失ったものだけはどうしても取り戻さなければならない。失ったものとの回路を復旧し、理解、あるいは、不断の実感のうで「原初」に戻れるようにするのである。それでこそ、文明や人類は、まったき存在となり得る。然るべきバランスを回復し、必要のない災厄を避けることもできるだろう。それが、ヴァン・デル・ポストにとって、oral literature を読み解くことの意義であった。あるいは、そこに、砂漠の奥をめざす悲惨な旅を経てまでもブッシュマンに会いにゆこうとした発想の起源があった。しかも、そうしたことは単なる観念上の満足とも、どのような机上の空論とも無縁であると彼

は考える。ヴァン・デル・ポストは、精細なユング論＝ユング伝を書いているが（*Jung and the story of our time*, 1976）、それは、現代文明と原始（原初）とを結ぶ可能性の証明のためでもあった。あるいは、彼は、そうした可能性のリアリティの根拠として、自身の素朴ではあるが、そのふんどんな知的反証によっても根本的には突き崩し得ない具体的な経験を挙げる。ここで問題になっているかまきりについて彼はこう書いている。

…たとえば、わたしが最初にかまきりをみたのは、夏の高地の草のなかのことだった。頭上には広大でなにもないかすんだ空、周りには静かで誰もいない平原が青く金色に広がっていた。そのなかでみたかまきりは、たしかに驚異に満ちていた。クララ[ブッシュマンの血を引く乳母]がかまきりに祈ったのも無理はない。かまきりはそこに座り、完全に敬虔な態度のうちに没入し、あたかも風がそのすました耳に原初の霊の物静かで小さな声を運んでくるのを待っているかのように、その奇妙な頭をいつも少しだけ片側に傾けている。くわえて、その顔にはどことなく奇妙に人間的なところがあった。その心臓に似た形、尖った顎、高い頬骨、黄色い膚——いまにして思えば、その顔はなんとブッシュマンに似ていたことだろう。それだけではない。その目は途方もなく大きく、きらきらと光り、あたかも特別な知覚能力を持つかのようなようであった。（168）

あるいは、

新約聖書の云う聖霊とは、人間が自然に持つ創造的想像力にほかならないと信じるのに、ほかになんら理由を持たなかったとしても、かまきりがいて、かまきりがブッシュマンの心に喚起し、ブッシュマンを通してそれがわたしの心に喚起したものがあれば、それで十分だと云えるだろう。（167-8）

いずれにしろ、かまきりの原初の霊としての正当性が真に証明されるには、それをさらに広い文脈に置いて検討する必要があるだろう。ヴァン・デル・ポストの著作で云えば、「かまきりの叙事詩」と題された章に始まる残りの部分がそれに相当するから、次はそれをみてみることにしよう。

5

かまきりには家族がいる。一風変わった家族である。彼の妻はイワタヌキである。ふたりには三人の子どもがいる。それと、ヤマアラシの養女、その夫クアマンガ＝ア（虹のなかにみえるなにか）、彼らのふたりの子ども（若いクアマンガ＝アとマンガースのイクニュウモン）、かまきりの姉の大青サギ、もうひとりの姉妹（かまきりが特別にかわいがっているスプリングボックの母親）といったものたちである。さすがのヴァン・デル・ポストも、こうした家族の構成員を知ったときには、「うろたえたと白状」している。だが、「これら幻想的な組み合わせには意味があるに違いない」という確信が彼にはある。というのも、ブッシュマンはイメージで話をするからである。そのほうが「多くを語る」ことができる。結果として、ヴァン・デル・ポストは、この解かり難い家族について解釈して、「かまきりの一家はすべて初期の種族に属す

る人々であった」、「かれらはみな人間のなかの原初の霊の要因をあらわすブッシュマン流の言いかた」なのだと考える。(180)

そうした家族を持つかまきりには、やらなければならないことがある。それは、「直接の自己を超えて創造するという仕事」である。なぜなら、「ただ存在するために生涯を生きるものはそれを失い、生成するためにその存在を失うものは永遠に生きる」からである。かまきり(＝ブッシュマン)は、「自身の最初の自己の、より偉大なあらわれとなるため」(200)、およそ4つの段階を踏みながら成長してゆく。かまきりは、最初にヒヒたちと戦い、最後には、養女であるヤマアラシの父「すべてを呑みこむもの」を招く。「偉大な場面のうえに凶運が暗く垂れ込め、生命の最初の演者が場面から黒人と白人によって駆逐されようとしている」。時代はそこまで進んだわけだが、かまきりは災厄をもたらす彼らを呪い不吉な予言を垂れる。

しかしながら、もしも呪いと予言に囚われていただけなら、かまきりはかまきりでなかっただろう。彼は、自分にもなにか間違ったところがあり、そうでなければそもそもこんなふうにはならなかったと悟る。自身を正さなければ、すべての生命は破滅することを彼は知っている。移ろう瞬間の彼方に創造を自覚し[第1段階]、人々とのやさしい交わりを通しての創造を経験し[第2段階]、あるいは、原初の時代の偉大な霊のように孤独のうちからひとりて創造するという個人の創造の段階[第3段階]を経たあとに、あらゆる創造行為のなかで最大のものがくる。すなわち、原初の霊、神もまた、自身を更新しなければならなくなる。同様に、黄昏時には人間もまた、もしも夜が再び永遠に来るべきでないとしたら、神との関係を新たにすることで自身を更新しなければならないのである。(258-59)

そうしたわけで、すべてを呑みこむものが招かれ、それは文字どおりすべてを呑みこんでしまう。だが、ヤマアラシはふたりの子どもを送り出し、すべてを呑みこむものの腹を割き、かまきりとクアマンガ＝アを、「食い尽くされた世界全体」を救い出す。かまきりの妻であるイワダヌキが先導し、家族を「新しい家」へと導いてゆく。

かまきりの物語はそのようにして終わる。最初から予想されるとおり、悪戦苦闘しながらも、かまきりは自身の仕事をどうにか成し遂げる。しかしながら、原初の霊としてのかまきりの正当性は、これにより少しでも証明されたと云えるだろうか。依然として多くは霧のなかに包まれたままであるように思えるが、ブッシュマンの「想像力の確かさ」に絶大な信頼を寄せるヴァン・デル・ポストは、少しもそれを疑わない。とするなら、問題の所在は、ブッシュマンとのあいだの距離だけでなく、ヴァン・デル・ポスト自身とのあいだに拡がる隔たりでもある。じっさい、それゆえにこそ、*The Heart of the Hunter* という作品はより一層読み難いものとなっている。このヴァン・デル・ポストの著作は、上述のようにかまきりとその家族の消息を告げるところで終わる。ようするに、読み取るべきことはすでにすべて語られているということになるのだが、あるいは、本稿の目標が必ずしも純粋なヴァン・デル・ポスト論をめざすものでないことをここでもう一度思い出し、これ以後は議論の方向をより積極的に oral literature のほうへとむけることにしよう。

すでに明らかになっていることのひとつは、ヴァン・デル・ポストによれば、oral literatureとは、原始（原初）につながるものだというのである。oral literatureについてはこれまで3回議論を重ねてきたが、なるほど、こうした発想は皆無であった。もしもこの発想を受け入れるならば、これ以後のものも含めて議論に一定の基盤が得られることはたしかである。oral literatureの存在意義とはなにかということが、これ以後は明確になるからである。しかしながら、そうした規定はどれほど一般性を持っていると見做してよいのだろうか。ヴァン・デル・ポストに云わせれば、すべては程度の問題だということになるのだろう。すなわち、ブッシュマンを最古の人たちだとするならば、それ以後の人たちの oral literature は、その古さの程度に応じて原始（原初）との関係を持つことになるのだと。ようするに、そうした関係の濃淡に応じて、個々の oral literature は評価されるべきであると。とするなら、たしかに彼の規定にも一理あることは認めてよいだろう。というのも、それら濃淡の示すそれぞれの段階は、相互的な優劣は別にして、それぞれの oral literature の全般的な有り様をあらわにしているはずだからである。同時に、本稿を含む一連の議論の究極の目標が、oral literature を研究することを通じて、次代の文学の新しい形を模索することにある点を思い起こすならば、そうしたヴァン・デル・ポストの規定に対して取るべき態度も自ずとみえてくるような気もする。つまり、それぞれの段階に属する oral literature は、求める文学の新しい形に対して、それぞれなりのやりかたで可能性の扉を開いてくれると見做し得るからである。とするなら、本稿を含むこれ以後の議論は、ヴァン・デル・ポストの規定をある種の信頼できる指標として受け入れてよいのかもしれない。問題は、個々の oral literature に対して、その都度どのようにしてそのあらかず古さの度合いを測るかという点にある。ヴァン・デル・ポストほどの博識を有するならば、それも比較的容易に行なえるのだろうが、一般論からすれば甚だその可能性は疑わしい。しかしながら、だからといって、軽々しく棄ててしまうにはもったいない指標には違いない。その指標にどれほどのことができるのか、ヴァン・デル・ポストのテキストを使って検証してみることしよう。

かまきりについて語るヴァン・デル・ポストは、それと並行させながら多くのブッシュマンの oral literature の具体例を挙げている。ここでは、そのなかから第十五章で紹介されている、リンクス（大山猫）と明けの明星（金星）との結婚の話を取り上げることにしよう。というのも、ヴァン・デル・ポストも云っているように、「この星とリンクスの結婚の話は、生命の原初の精神が想像力の火のなかで鍛えた驚くほど正確な言葉の、わたしが知るかぎり、もっとも靈感に満ちた例」だからである（218）。とするなら、いずれにしろ「原初の精神」を軸に展開される規定＝指標の効力を試すには、これは絶好のサンプルとなり得るはずである。同じくこの引用にある「驚くほど正確な言葉」というのは、たとえば原初の霊＝かまきりといった構図をも含む、ブッシュマンの想像力の選択の確かさについて述べたものであるから、その意味でもこれは検証に値する。しかも、この話は、ブリークの著書においても詳しくまとめられており、その側面からもより深い説明を期待してよいだろう。

悪役は雌のハイエナである。雌のハイエナは、明けの明星の花嫁としてリンクスが選ばれたことに激しく嫉妬する。ある日のこと、狩人である明けの明星が狩りに出た留守に、雌のハイエナは、ブッシュマンの米（蟻の卵）を使ってリンクスに魔法をかける。脇の下から汗を取り、

それをブッシュマンの米に混ぜる。リンクスはそれを食べ、魔法は直ちに効き目を表す。リンクスから飾りという飾りが落ちる。耳飾り、腕輪、足飾り。毛皮の外套が弛んですべり落ち、皮膚のペチコートも同じようになり、サンダルを足に結び付けていた紐が切れる。リンクスは裸で泣き叫びながら走り去り、葦のなかに座り込む。妹が助けに入り、姉が子どもに乳をやるよう仕向けるが、ハイエナの魔法はますます強くなってゆき、葦のなかから母親を誘い出し授乳を促す子どもの力はますます弱くなってゆく。いまがそのときとばかり、ハイエナはリンクスのふりをして自信满满明けの明星の部屋に入る。けれども、ここでリンクスの妹が明けの明星にハイエナの陰謀を打ち明ける。すぐさま彼は行動を起こし、ハイエナに槍を投げつける。槍は外れるが、ハイエナを退散させ、あわてたハイエナは、小屋の外の火で足に火傷をしてしまう。

以上が、ヴァン・デル・ポストが紹介するエピソードのおおよそである。これではなんのことでか解からないというのが一般的な反応だろうか。もちろん、その程度のことなら、ヴァン・デル・ポストも十分予想しているから、このエピソードに限らず、多くは詳しい彼の解説が同時並行的に付されている。ここでの解説は次のようなものである。ブッシュマンにとって星は偉大な狩人だが、とりわけ明けの明星は、彼らにとって最高の狩人である。その最高の狩人が自身の花嫁としてリンクスを選ぶ。なぜだろうか。ヴァン・デル・ポストは、自身の経験を介しながら書いている。

わたしが子どものころ暮らしていた…マウンテン・オブ・ウルヴズには数家族のリンクスが棲んでいたから、彼らを観察する機会に多く恵まれた。そのうちの一匹をペットにしようとさえしたが、囚われの身に甘んじるくらいなら死を選ぼうとするので、逃がしてやるほかなかった。自然状態のリンクスは、炎のような優美さ、勇気、活力、本能など、わたしの経験ではどの点からも、ほかの動物には比べられないような印象を与えた。マウンテン・オブ・ウルヴズに棲むリンクスが、洞窟のはるか奥の闇に姿をみせるとき、そのさまはまるで暗い井戸の底から引き上げられてくるランプのようだった。ほかの猫属にもはつらつとしたさまや優美さの点で劣らないものがあるが、それらにはリンクスの星のような存在感にかけている。たとえば、雌ライオンはあまりにも身体が大きすぎるから、そのように大きなものが星と結婚するということは、つりあいという点からみあり得ない話である。豹は雌ライオンの持つすべてのものを持っていて、大きさも適当だが、残念ながらそれには斑点がある。アフリカの早朝のしみひとつない暗い空に純粹に輝く夜明けの心[明けの明星]が、斑点のある花嫁を持つとは考えられない。ただリンクスのみが、姿、大きさ、無垢の炎の色といった要求のすべてを満たしているのである。(218-19)

悪役がハイエナである点については、もっと分かりがよいだろう。ジャッカルやカラス同様、ハイエナも腐肉を食らうが、

ハイエナを悪党の長としたのは、アフリカの最初の人たちを特徴付ける、正確な真理への生来の配慮を示すもうひとつの例である。ハイエナは暗くなるとはじめて穴から姿をあらわす。強い力と強靱な顎を持つにもかかわらず、弱いものしか殺さないし、ほかの動物の勇気や創意、労力に頼って生きるのを好み、ライオンや豹のご馳走の残り物からできる

限り漁り取る。ブッシュマンにとって、ハイエナは闇の力と悪の支配のもっとも明瞭に認められた代表者だった。(219)

あわせて、ヴァン・デル・ポストは自身の経験を語っている。

…かつてハイエナに出会ったことがある。そのときの出会いによってわたしは多くのことを教えられた。そのハイエナは、あきらかに夜活躍する能力を伸ばしすぎ、穴に帰り着くより先に昼になってしまったのだ。その目は暗闇をみるように作られていて、遠くを明瞭にみることはできない…一分かそこらだったが、生まれてはじめてわたしはハイエナの目を覗き込んだ。それはわたしがあらゆる生き物にみたもっとも悲しげで絶望的な目だった。それにより呼び起こされたものによって、わたしはすっかり意気消沈してしまった。故郷のマウンテン・オブ・ウルヴズで、無防備な雌羊や子羊、スプリングボックに対してハイエナが酷い仕業をするのをみたことがあるが、そのためにハイエナを嫌悪するのはやめにした。白日のもと、突然すべての理性を失い、わたしたちが狂気と呼ぶ孤独の暗闇の穴にもぐってしまう人に対して感じるのと同じ気持ちを、わたしはハイエナに対して感じたからである。(219-20)

この経験は、「ハイエナにこの芳しくない役割を付与するときにさえ、親近感を失うことのないブッシュマンの想像力」の素晴らしさを大いに語るものだと、ヴァン・デル・ポストは云っている。

ところで、問題のエピソードにおいては、「ブッシュマンの米（蟻の卵）」が重要な小道具として登場する。ブッシュマンには非常な珍味、蛋白源とされているものであるが、これには、ふたつの星「祖母のカノープス」と「祖母のシリウス」が関係している。なぜなら、これら星の祖母たちはブッシュマンの米を運んでくれるからである。

…ある日のこと、繊細な植物に害を与えるというのでカラードの庭師が蟻の巣を掘り起こすのを手伝ったことがある。そのときわたしははじめて女王蟻をみた。黒い大地に横たわり、磷光を帯びた奇妙な白色で、形がなく、新しい生命ではちきれんばかりになっていた。庭師がそれを払いのけるまえに、わたしはそれを観察したが、どうしても思い出せないある記憶に悩まされた。その夜のことである。わたしは草のうえで毛布に包まり、ほとんど真上で輝くシリウスがとても大きく光に満ちて、光芒も形もないのを見て、思い出せなかった記憶がなんであるかを知った。夜のこの星の形と色とは、黒い大地に横たわる女王蟻のそれだったのである。(214)

ブッシュマンの想像力とは、あるいは、彼らの観察力の鋭さ、自然との「神秘的融即」の実際とはそうしたものであると、ヴァン・デル・ポストは云う。

リンクスにとってもブッシュマンの米は好物である。ハイエナはそれに自分の脇の下の汗を混ぜる。

これは、ハイエナの精神が食べ物の中に入り込み、リンクスの精神的な栄養物になっ

たというブッシュマン流の言い方である。というのも、ブッシュマンにとって、食べ物とは単なる食べ物ではないからである。たとえば、ブッシュマンの父親は息子にジャッカルの肉を与えないが、これは、ジャッカルが臆病者で、その肉は子どもを臆病にすると考えられるからである。(221)

ブッシュマンにとって、「食べることは人が成る」ことを意味する。

…しかしながら、脇の下の汗を取ってリンクスの食べ物に混ぜることは通常以上の意味を持っている。ブッシュマンにとって、脇の下とは特別な存在の源であった。そこは生きているものの精髓が出てくる場所である。光と暖かさの源であり理性の力と栄光の大いなるイメージである太陽は、かつて初期の種族の人間の脇の下であった。ゆえに、息子を男社会に加えるのに、脇の下の汗を取ってその頭にすり込むのである。雌のハイエナは、リンクスの食べ物にこうして魔法をかけることで、それをハイエナの精神の濃縮されたものである闇と邪悪に満ちた力へと変えたのである。(221)

ハイエナの魔法により飾りという飾りを剥ぎ取られたリンクスは、葦のなかへと走り去る。

つまり、そこは水辺であり、ここでは生命が最初に克服しなければならなかった混沌のイメージを表している。狂気の接近、人間の光と意識のなかへの、暗い無意識の力の侵入を意味するブッシュマン流の言い方である。リンクスが失うものはすべて精神の意識的な現われを象徴するものである。飾りは精神が自らを表す芸術と優美さの象徴であり、外套とペチコートは、それが日々身にまとう生ける思考、サンダルは、それが地上で選択した生き方を表している。精神がそれらすべてを失うとき、原初の水のなかでの溶解が差し迫っているのである。(222)

リンクスのエピソードにおいて、子どもが葦のあいだから母親を誘い出し授乳させようとする力が弱くなるのは、「暗闇に対する魂の永遠の闘いで、愛の偉大な女性的力は不可欠だが、それだけでは十分でないことを認めるブッシュマン流のやり方である。女性の愛がいかに大きくても、男の武器が必要なのである」(223)。リンクスの妹から話を聞き、明けの明星が槍を投げるのは、「彼が自分の正確で識別的な男性的精神を、ハイエナに内在する混沌と暗闇、そして恐怖に対して投げつけたことを表すブッシュマン流の言い方である」(Ibid)。その槍がハイエナに命中しないのは、「破壊し得ないのが悪の本性だから」である (Ibid)。代わりにハイエナは足に火傷を負うが、「そういうわけで、ハイエナはアフリカの朝の光のなかを、あの奇妙なびっこを引くような足どりでそこそと家に戻るのである。そのようすは、まるで足になお火傷の火ぶくれが残っていて、地上の生活の恐怖から魂を解放する愛と勇気の力を永遠に証言しているかのようである」(224)。

たしかに、アフリカの最初の人にとって、それ以来夜明けの心は、ノアの子孫にとっての空に架かる虹と同様、意味深いしるしとなった。思うにそれは彼にとって、空のもっとも美しく明るく大胆な天体が、闇の微妙なたくらみに対して永遠に警戒してくれているこ

との証拠である。人間の魂の内奥の深いところに、混沌と古い夜に対して永遠に魂を守護する光り輝く要因があることを示している。夢の到来に先行し、砂漠の狩人によれば、その夢はいまだブッシュマンを夢見ているのである。(Ibid)

いずれにしろ、

…花嫁が酷い災難に遭ったその日から、夜明けの心は毎朝家路に就くとき、警戒怠りなく目は大きく見開かれ、光に満ち、閃光を放つので、腐肉を食らうものたちは、向きを変えて自分の穴ぐらに急ぐ。ハイエナがまた悪さをしないよう、夜明けの心は矢をつがえ、大またで歩く一歩ごとに槍を地面に突き立てながら家路を急ぐのである。(224-25)

7

以上が、できるだけ完全な、明けの明星とリンクスの結婚の話に付されたヴァン・デル・ポストの解説である。エピソードそれ自体の要約に比べて解説の長さが何倍にもなるのは、ブッシュマンと現代との距離がそれだけ離れているからでもある。しかしながら、ブッシュマンがこれらのエピソードを聞く（語る）とき、そうした解説と等価であるはずの言葉以前の衝撃が、その（頭ではなく）精神を目にも留まらぬ速さで駆け抜けはしないだろうか。もちろん、たしかに「等価」とは云ったが、その実質は似て非なるものである。とはいうものの、迅速と鈍足の違いを無視するならば、ヴァン・デル・ポスト同様、現代人もブッシュマンと同じ場所に立つことができる。これはきわめて重要なことである。なぜなら、肝心要の原始（原初）との通底は、それでこそ最低限の保証を得ることができるからである。あとは、難解な現代詩をますます巧みに読みこなすように、テキストとの距離を縮めてゆけばよい。ヴァン・デル・ポストにとってブッシュマンを理解するというのは、けっきょく、そういうことを云うのだろう。そして、最低限の通底さえ保証されるならば、たしかにそうした理解＝学習は実行可能である。あるいは、このことと、いま問題にしているヴァン・デル・ポストにより提示された規定＝指標の効力とはけっして無関係ではない。このことは、そうした効力の次元においても、同様に基盤を成すはずだからである。そのうえで、個々のエピソードは智恵となり癒しとなり、あるいは、美的快感の源泉となるだろう。

本稿の鈍足の議論をさらに続けよう。上記ヴァン・デル・ポストの解説においては、「ブッシュマン流の言い方」という言葉が何度も使われている。つまり、ヴァン・デル・ポストは、そうした特有の言い回しを現代風のそれへと、いわば翻訳しているわけだが、そのようになる理由は、先にも指摘しておいたように、ブッシュマンはむしろ「イメージで語る」からである。したがって、それに対して即座に反応できない読者を相手とする際には、エピソードに付随する解説が必要になるし、同時にそれは長くもなる。しかしながら、問題のイメージさえすみやかに共有されるならば、なんの苦勞もないはずである。それがそうならないのは、ようするに、ブッシュマンという存在が、究極的には他者にほかならないからなのだろうか。現代が原始（原初）へと確実に通底していると考えるヴァン・デル・ポストは、そうでないと云う。じっさい、それを証明してみせることが砂漠の探検となり、本書執筆の動機のひとつもなったわけだが、たしかに、上述のエピソードで言えば、とりわけそこに登場するハイエナの姿は、現

代人にとっても馴染みやすいものに違いない。強力な顎を持ちながら、強者のおこぼれに預かり弱いものしか殺さないという狩りのやり方、ヴァン・デル・ポストが覗きみたその目の悲しげで絶望的な表情、びっこを引くような足どりで、肩越しに辺りを見回すような動作をしながら走り去るこそそとした様子等々、どのイメージもそのまま現代人にとって共有できるものばかりである。その精神の濃縮されたものが身体に入れば、例えばリンクスの飾りという飾りが落ちて不思議でないし、あの走り方は、なるほどなおも足に火傷の火ぶくれが残っているからだというふうにも思えてくる。ブッシュマンにとって特別な秘所であるという脇の下のイメージは別にしても、暗い夜空を背にして光り輝くシリウスが黒い大地に横たわる女王蟻だということにも、グロテスクなイメージながら、はっとさせられるものがあるし、それを云うなら、アフリカの早朝の明けの明星という特別な存在が、もっとも偉大な狩人としてイメージされるのも、いったんそうと知らされれば、さして困難な連想とも思われなくなるだろう。もしもそのように連続的なイメージの共有が可能であるならば、たしかにブッシュマンは他者ではないだろうし、あるいは、ヴァン・デル・ポストが示唆するとおり、埋めるべき隔たりが大きければ大きいほど価値があることにもなる。その隔たりとは、失われたものの総体の謂いにほかならず、しかも、それら失われたものの多くは、無価値であるがゆえに遺棄されたものではなく、不承不承置き忘れてきたはずのものだからである。違っていればいるほど、離れていればいるほど、そこから得られるものの総量は大きくなる。くわえて、ハイエナやシリウスの例からも明らかのように、首尾よくイメージを共有できたときの衝撃はより感動的なものにもなるだろう。本書においてヴァン・デル・ポストが読者に伝えようとしているのも、けっきょく、それなのだと思う。じっさい、かまきりの叙事詩を物語るに先立って、彼はこう書いている。

かまきりの人生におけるそれらの存在が、偶然のものではなく、明確な意味を持つという事実をひとたび受け入れると、それらをめぐって、母や祖父の農場でした幼年期の経験にまで遡り、さらには、それらを成長したのちの考えに結びつけることができるようになった。しばらくすると、それらの現代におけるイディオムであり、人間のなかに等しく存在すると信じるものにわたしはたどり着いた。全体が突然意味をなした。願わくば、物語が進むにつれて、それぞれの登場人物に出会う際に、この感覚が現れてくれるように思っている。(180-81)

「突然意味をなした」というのは、ヴァン・デル・ポストにとっても、多くは発見だったことを示している。とするなら、彼に比べれば、ブッシュマンやその世界からより遠く離れている一般の現代人にとって、なおさら発見する喜びは大きくなるはずである。あるいは、ヴァン・デル・ポストが発見の際にたびたび認知したと云う、ブッシュマンの持つ「想像力の確かさ」という想いにも、より具体的に味わい到ることができるだろう。最後にもう一度かまきりに戻ろうと思うが、そのまえに、長いあいだ置き去りにしたままの、ブリークの著書に触れておくことにしよう。そこにおいて、リンクスと夜明けの心の話がどのようなになっているかみておこう。

ヴァン・デル・ポストの再話と、ブリークが純粹ブッシュマンから聞き書きしたものとのあいだには、話の筋という面からみれば、さして大きな違いはない。とはいえ、全体の印象としては、なるほどヴァン・デル・ポストの現代英語とブリークのできるだけ忠実な逐語訳という言語的な相違は無視するにしても、両者のあいだの隔たりは決して小さくないと云ってよい。第一に、ヒロインであるはずのリンクスが少しもめだたない。それを云うなら、悪役のハイエナもそうである。それに対して、アクションの多くは、リンクスの妹により占められている。この妹はたしかにヴァン・デル・ポストの再話のなかにも登場するが、一貫して脇役の域を出るものではなかった。それが、ブリークのテキストにおいては、たしかに役柄としては脇役だが、それとは裏腹に動きの面では活発そのものなのである。リンクスは、葦のあいだに逃げ込んだままほとんど動かないし、夜明けの心は狩りに出てばかりいる。それらのあいだを取り持つようにして、じっさい、リンクスの妹が右往左往するわけだが、これはいったいどうしたわけなのだろうか。

リンクスの妹が動き回るのは、たったひとつの目的のためだけである。葦のあいだに身を隠した姉のもとを訪ね、自分の子に乳を飲ますよう促すこと、ただそれだけである。それが、動作も台詞も同様に、毎回正確に繰り返される。“O! ko-g! nuin-tara! let the child suck”/Her elder sister sprang out of the reeds/Her younger sister said: “I am here!”/She allowed the child to suck. といった具合にである。毎回正確に繰り返されるのは、単純に、乳をやるというのはそういうことだからだろう。でないと、姉の子は死んでしまう。ようするに、リンクスと明けの明星の結婚というこの突拍子もないエピソードには、一筋のリアリズムが貫かれているということなのである。おそらく、これが重要なポイントのひとつなのだと思う。すなわち、突拍子もない奇想と、それと相反するリアリズム、そして、それら全体を包むように展開される繰り返し、及び、それにより醸しだされるリズム。ヴァン・デル・ポストなら、事の真相とはつねにそのようにして表現されるものだと云うだろうが、いっぽうにおいては、澁むことなく時間は流れている。これもブッシュマンの持つリアリズムの表われと云えないこともない。それでいて、そのように同様の内実やテンポで展開される個々のセクションにおいて、ひとつだけ徐々に変化してゆく側面が露出している。ほかでもない、少しずつリンクスの身体＝精神が弱ってゆくという点である。姉は妹に日々それを訴えるのだが、その言葉遣いは（おそらくは哲学的に）微妙であり、そこにもなんらかの意味が隠されているのはほぼ間違いない。それよりもむしろここで注目したいのは、少しもまえに進まない繰り返しと、砂時計の砂が落ちるように、少しずつ移り変わってゆく側面との、云うにいわれぬ関係の妙である。oral literature について考える場合には、声とそれに付随するリズムのことを忘れてはならないが、この関係の妙にそれらを考え合わせるならば、oral literature の要点はほぼ知り尽くしたと云っても過言でないような気さえする。

ところで、先に予告しておいたように、最後にもう一度かまきりのところに戻ろうと思う。ヴァン・デル・ポストの著書同様、本稿においても、かまきりは議論の出発点であったし、うえで取り上げたブリークの著書においてもそうだからである。原初の霊としてのかまきりの正当性という難問に対しては依然として答えを留保したままだが、本稿においてこれまで積み重ねてきた議論と、ブリークによる聞き書きとをつき合わせてみれば、答えとまでは云わないに

しても、なんらかの風景がみえてきて奇怪しくないように思われるからである。

ヴァン・デル・ポストが「かまきりの叙事詩」の章で紹介している話のうち、ブリークの著書にもあるのは、死んだハーテビーストに化けるかまきりと初期の種族の子どもたちのエピソードと、かまきりがヒヒたちと戦うエピソードのふたつである。前者において、子どもたちが石のナイフで解体したハーテビーストの身体の一部がかまきりに変化しながらふたたび合体してゆく様子は、優秀なシュールリアリズムの小説を読むようで奇抜だが、ここでは紙数の関係上、特に後者に注目することにする。それは、ヒヒたちによって息子を惨殺されたかまきりが、息子の目玉をボールにして遊ぶヒヒらからそれを取り返し、(あらゆる生命の源泉である)水辺の水にそれを浸けて、見事息子を再生させるという話である。ブッシュマンの語るどの oral literature についても云えることだが、ここでも話の要約は、多くその実体を言い当ててはいない。ひとつには、かまきりの息子が惨殺される際に、ヒヒらのあいだでやりとりされる繰り返しの妙がそこからは抜け落ちている。かまきりの息子を殺すに先立って、ヒヒたちは、「おい、ちょっとこっちに来てこの子の云うことを聴いてみるよ」と次々に仲間に声をかけ、そのたびに群がる集団が大きくなってゆき、同時に、かまきりの息子が云う「踵のうえに尻をおろして座るものたち」というのが自分たちを軽蔑的に指すことばであることを了解し、結果として子どもを殴り殺してしまうからである。ここでの繰り返しは、リズムのもたらす快感といったものを超えて、きわめて純粋なリアリズムへと接近している。この繰り返しから解かるのは、ヒヒたちの群がる習性、文字どおり幾度もくりかえしたのちによりやく事の真相へと到る理解の悪さ、それとは逆にいかにもあっさり惨殺へと到る性急さ、ボール遊びに熱中する狂気にも似た爆発、それら全体を通じて指摘できる視野の狭さといった諸々の特徴である。じっさい、それだけ知れば、ヒヒをみたことがなくてもそれがどんな生き物であるか理解できるほどであり、このリアリズムは、先にみたハイエナの例にもまして優れている。けっきょく、ブッシュマンの oral literature が教えてくれる要点とは、この点にこそあるように思われる。すなわち、いかにもリアリティに欠けているようにみえる幻想的な関係や出来事を提示しながら、その実それらを貫いているのは、純度の高いリアリズムにほかならないといった一種の矛盾。それが矛盾にみえるのは、現代文明がブッシュマンたちから離れているからであり、同時に理解を困難にしている原因でもあるのだが、そうした幻想とリアリズムとの交錯は、かまきりを原初の霊と見做すことに対してもそっくり云えるはずである。原初の霊とは、突き詰めればブッシュマン自身にほかならず、したがって、それはなにより身近な存在でなければならなかった。かまきりはその条件を満たし、なおかつ、ブッシュマン本人のように身体は小さく、ささやかな存在でもある。そうした同一性の示す小さな一点から、ブッシュマンたちは、世界をまさしく原初の状態から物語として再構成してゆくのだが、その過程が少しもリアリズムの原理に即しているようにはみえない。しかしながら、細部をよくみてみれば、ハイエナやヒヒたちが示しているように、きわめて純粋なリアリズムが息づいている。ヴァン・デル・ポストが指摘する、まさしく正確な選択を行うブッシュマンの想像力というのは、すなわち、これを指して云っているのだと思う。リアリズムと反リアリズムの交錯による幻惑、それから解放されさえすればみえてくる境地、それへと到る筋道は明らかに発見そのものであり、発見こそは、芸術的快感のうちで最高のものである。あるいは、こうも云えるのかもしれない。oral literature を読むことは、隠れたドラマを読むことにほかならないと。そのドラマは、一見幻想的な組み立てにみえるが、それを透かすように凝視してみれば、いかにも堅実なリアリズムにより支えられ

ているという事実が解かってくる。だとしたら、これは途方もない文学だと云わなければならないだろう。

そうした特異な文学の有り様をさらに求めて、次は、エイモス・チュツオーラを取り上げようと思う。ブッシュマンに比べれば、あまりの飛躍とみえないこともないが、それでこそ、今回前回とヴァン・デル・ポストを通してブッシュマンと oral literature について考えた意味もある。ブッシュマンとチュツオーラとは、原始と現代というふうになんぞそれぞれ両極端を代表している。だが、同時にそのように単純には云い難いところもある。ある意味においては、踵を接しているとも云えるような側面をそれぞれに持っている。次回の議論においては、なによりもそれを明らかにしたいと思っている。

【テキスト】

van der Post, Laurens. 1961. *The Heart of the Hunter*. Harcourt, London.

【参考文献】

Bleek, W. H. I. and Lucy Lloyd. 2001. *Specimens of Bushmen Folklore*. Daimon, Einsiedeln.

Jones, J. D. F. 2001. *Storyteller: The Many Lives of Laurens van der Post*. Scribner, London.

van der Post, Laurens. 1976. *Jung and the story of our time*. Vintage, London.

秋山さと子訳 『狩猟民の心』（思索社、1987）